

新しい旅の形を模索するオンラインツアー

◆VRゴーグルを活用するバーチャル修学旅行

新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、オンラインで旅行を体験する「オンラインツアー（バーチャルツアーともいう）」が注目を集めている。

JTB総合研究所が2020年10月に公表した調査結果（対象は全国20歳以上の男女、調査実施は9月）によれば、オンラインツアーの経験率は国内ツアーが11.3%で、海外ツアーが10.4%だった。国内、海外とも、若い世代で旅行頻度の高い人ほど利用率、利用意向とも高くなる傾向があった。

コロナ禍で中止の動きが出ている修学旅行にも、オンラインツアーが利用され始めている。JTBは「バーチャル修学旅行360」を開発、全国の小中学校や高校を対象に、20年8月末から「京都・奈良編」の予約受付を開始した。生徒たちは、教室でスマートフォンに装着する簡易型のVRゴーグルを通して、鹿が歩く奈良公園の散策や京都の名所・保津川下りなどを楽しむことができる。JTBによると、バーチャル修学旅行は、11月時点で26校、約3,000人の申し込みがあるという。

◆オンラインツアーで新しい需要の掘り起こしも

観光業界では、現地のガイドと参加者を生中継でつなぎ、双方向で会話をしながら疑似旅行を体験するオンラインツアーも増えている。海外旅行ツアー予約サイトの「ベルトラ」は、20年7月からオンラインツアーを開始、9月には中国・西安の世界遺産、兵馬俑を巡るオンラインツアーを企画・販売した。ビデオ会議システムZoomを使って中継し、中国在住のガイドが散策しながら解説し、最後に質疑応答の時間もある。同社は、国内外で約80のオンラインツアーを展開し、各ツアーの平均時間は1～1時間半、料金は2～5千円が多い。従来のツアーでは健康面で不安のある高齢者や子育て世代などの参加が少なかったが、オンラインでは参加しているという。その他、阪急交通社が企画する事前にご当地グルメを届けるツアーや、日本航空が離島との共同で島の特産品を届けるツアーなどもある。

コロナ禍で生まれたオンラインツアーだが、オンラインならではの新しい旅の形と、新たな需要の掘り起こしの可能性も見えてきた。 【秋元真理子】